

飯島賢二の『恐縮ですが...一言コラム』

第302回 教育における「差別」とは...クソ教育委員会発言の是非を問う

2009.3.15

人権団体の言う教育現場における「差別」とは、一体どういうことなのだろうか？

鳥取県の公立小学校には「学級委員長」がいない。リーダーを決めれば差別につながる、との抗議を入権団体などから受け自粛した結果なのだろう。しかし、2009年春から鳥取市で1校だけ20年ぶりに「学級委員長」が復活する。市の教育委員会が2、3年前から子供達の社会性、自主性を育てるために復活を呼び掛けてきた成果らしいが、後に続く学校が現れるかはわからないという。小学校の「学級委員長」を「人権」の視点から無くす自治体は大阪以南に多い。愛媛県が04年に調査したところ、同県の約半数の小学校が「学級委員長」を置いていなかったそうだ。

今時の運動会、現代では競争させない運動会が主流らしい。順位というのが全く無い学校もあると言う事を聞いたことがある。一番になった子供も、ビリになった子供も「がんばりましたで賞」という賞状を貰うだけなのだ。競争には、何事にも負けない心を育てる、努力をするという事、諦めないという事にも繋がる。かつての子供にはみんなライバルが居て、その子には絶対に負けたくないという気持ちから、運動会前には自分から進んでトレーニングを行っている姿が見られた。努力のかいもあり、見事そのライバルに勝つ事が出来るようになった時の喜びは貴重なものがあった。「何事でも努力すれば叶う」という事が分かり、精神的にも大きく成長した筈である。

競争が本当に「差別」なのか？ 競争させない事で、全ての子供の人権を尊重しているように見えるが、実際にはそうでは無い。かけっこが苦手な子供も居れば、得意な子供も居る、色々な個性をつぶし、画一的・ロボット生産教育を実施してきた結果がどうだったのか、まだ、分からん輩がいる。

文科省「全国体力テスト」の結果の公表や、大阪府の橋下徹知事が、「クソ教育委員会」などと罵倒して論議をよんだ「学力テスト」の結果発表も、やらない理由には同じ思想的基盤があるのだろう。

この世の中にまったく競争が存在しないのなら、順位づけのない運動会もいいのかもしれない。でも、社会ではどうしても競争原理がはたらく。高校や大学は“学力の差”で振り分けられ、企業に入れば営業成績などの“能力差”によって給料も変わってくるのが現実であろう。子供に順位をつけることを、差別で悪だという声は、「まったく競争を経験させていない子供達を、競争が渦巻く社会に無責任に放り込むこと」であり、そのほうが、よっぽどの悪だと思う。だから、子供達が可哀想でならない。

その結果、ここ数十年来、子供達がどう変わっただろうか？

負けじと努力する闘争心は失われ、忍耐や辛抱という文字がなくなった。耐えることができないから、最初から安易な道を選択する。楽な方へ、簡単な方へと逃げようとする。だからやるべき事の本質が理解できず、無責任極まりない社会人ができてしまう。競争がないのが平等だと教えられた子供は、世の中みんなフラット社会だと勘違いする。先生も上司も、基本的には同じだと思い込み、理不尽な言動を繰り返す。新たなステージに挑戦する気構えは益々薄れ、無理をすると精神的にも、肉体的にもいけないと、無難で、慣れた今まで通りが居心地よいと、信じ込んでしまう。

実は世の中、こんな世界は何処にもない。現実には打ち叩かれ、その対処法を身につけられない現代の若者が、適応障害やうつ病となり、多くの人が苦しんでいる。その元をつくったのは誰か！冷静に反省すべきである。そうでないと、将来を担うべき若者が、あまりにも気の毒すぎる！！